

素晴らしい須走を知りたい!

「素晴らしい隊」養成講座 第2回講座概要

第1部：座学 絵図に見る須走集落「地区の成り立ちと特徴について」

■日時

令和2年10月10日(土) 9時~12時

■場所

須走コミュニティセンター

■講師

○菊池 邦彦 東京都立産業技術専門学校 名誉教授

■講義概要

1. 須走村というマチ

須走村の位置

- 神奈川県逗子から来ている。三浦半島の鎌倉と葉山の御用邸の間にあるのが逗子という町。道が集まって交差する所の「辻」とか仏像を安置する「厨子」からきているという説がある。東海道線と御殿場線でここに参った。
- 図 A-②-1「逗子名物饅頭」は近くの屋号「饅頭屋」の包み紙。田越川の「富士見橋」のたもとにある。ここは、田越橋だったが、明治20年代に富士山が見える事で売り出していこうとしたのか「富士見橋」に変えた。江の島から富士山が見える。逗子の海岸では、半分から内陸側に来ないと見えない。桜山という細長い江戸時代の村がある。
- 図 A-2-②, ③は「差上申手形之事」桜山の石渡さん宅の往来手形。これが寛政12年(1800年)、60年ごとの庚申の年で富士山が生まれた年だ。1860年(万延元年)、1920年(大正9年)、1980年(昭和55年)、次の庚申縁年は2040年。「富士山」に登山者が集まる年。庚申縁年に「此度駿河国富士山参詣ニ罷越申候間、御関所以……御通し被遊被下候様……以上」と往来手形に書いてある。そこに「矢倉沢御関所御番御役人衆中様」と宛名が書いてある。先ほどの図 A-① で国府津のあたりから入り、矢倉沢、足柄峠を超えて竹之下を通る。矢倉沢の関所を通り、富士山に参詣したいという願いが出ている。どこを通過して来たかが問題だが、多分須走口にたどり着いてそこから登山をしたのではない。竹之下から須走の間に古沢、一幣司浅間神社がある所が最短距離。ところが江戸幕府、小田原藩が御殿場という町を作った。登山者は最短距離を通りたいが、御殿場を通り、お金を落としてもらいたい小田原藩は御殿場を通るように指示をだした。ぐみ沢を通過して須走に至る。小田原藩は庚申縁年の1680年にこのあたりに並木道を作り、ぜひこっちを通るようにという強い態度を示している。しかし旅行記などを見ると、一般の人は古沢の方を通過していたようだ。古沢を通るのか御殿場を通るのかという争いは、須走に至る道として非常に大きな問題を巻き起こしている。
- 図 A-②-3 は、寛政12年、11人のグループと14人のグループが来ている。幕末に近い天皇陛下まで資料が残っており、いずれも矢倉沢往還を通過している。逗子の海岸の真ん中位の海岸近くに開成高校には元富士塚があった。これは古墳で内容物は東京の国立博物館が行っているが、富士塚というところから出てきたものがある。ただし鎌倉との境の小坪にも富士山に行った人が何人かいて、須山というところに行っている。矢倉沢往還を通ったかどうかはわからないが、三浦半島からちょうど富士山が見える、富士山へ行こうというのは伝統である。



一須走は東の方から富士山に至るという事で東口、須山(裾野市)、南口(南東口)・表口は富士宮、村山。道者が必ず宿泊、参詣するのは富士山浅間大社。そこから村山に至る。北の方では吉田口(昔の上吉田村)がある。石和峠を越えてすぐの川口集落にも御師がいる。実は川口が一番多くて120~130人御師さんがいる。上吉田村は江戸時代後半86軒、幕末近く、明治初め頃は100軒だと言われている。それに対して須走は17軒、須山は12軒、川口さん入れて13軒。村山は大鏡坊、辻之坊、池西坊で3坊。北の方はずいぶん御師さんの人数が多いが、この駿河の国の特色をみなさんと一緒に考えていきたい。

一いつごろから須走村の姿が描かれているのか。3年ほど前に世界遺産センターで報告書を出した。Aの地図は、上吉田村は幕末まで御師が名主だったが、村方騒動で一般人から初めて名主になった藤井与三郎家所蔵。村上派の御師をなさっているような伝統もあったらしい。富士吉田市史の月呬御身抜。富士講の伝統で言うと、角行さん一日呬(にちがん)さん一月心(がんしん)さん一月呬(げつがん)さん、月行さんに分かれて食行身禄さんがいる。この系統が月心さんと村上光清(こうせい)さん。身禄さんのお師匠さんの兄弟子、月呬さんが描いた宗教的な富士山の絵図。延宝8年、これも庚申の年。この図の左下の所に、「すはしり宿丁」と書いてある。私が知る限り須走が描かれた一番古い図ではないかと思う。江戸時代前期。元禄13年が1700年だから、それより20年くらい古い頃となる。ここで注目したいのは、須走の「宿」という字が使われていること、「丁」=町が使われているという事。この頃から須走村が「宿」的な、あるいは「町場」的な要素を持っていた。須走のお浅間さんのことを「下仙元堂」と言っている。吉田の北口本宮も本来は「下仙元堂」、2合目の御室浅間があるがそれが「上仙元堂」という。須走もこちらの浅間さんは「下仙元」で、登山道の浅間さんは「上仙元」。吉田口から登ってきた道と須走口を登ってきた所、富士山の8合目の大息合という合流点がこの絵図には描かれている。上吉田系、月呬さんの北口に集まってきた富士講の人たちの指導者、その御身抜(宗教的にその人の富士講の信仰世界を表したもの)に須走の様子がすでに描かれている。

須走の町並み

一須走にどのくらいの人が住んでいたのか? 図B-①が須走浅間神社所蔵の絵図。神主の小野繁さん作成の絵図を参考にして作成された図がB-②。明治の初めの須走の住人の名前と屋号で、出身地と屋号が必ずしも一致するわけではないが、色んな地域から須走に集まってきて、村を成しているのが分かる。村には「火切り地」という火事を避けるための場所が設けられている。ヘダの木を家の周りに植えて火をよける。須走は、火事に見舞われることが多かったので注意をしていた。また、必ずしも須走の町は富士山に向かっていない。浅間神社の左側に位置に成されている。上吉田は富士山の雪代の被害がたびたびあった。須走でも人がなくなるような出来事あったので、雪代を避ける考え方がこの浅間神社の森と須走の向きにあるのではないかと考える。須走の入り口、御殿場の方面に門が建ち、柵がある。荷物を改めたり、流通税を取ったりする場所が、「改場」「荷問屋」である。門を入れて左側にあったようだ。ここは現在のバス停須走口を降りた小さな公園あたりか、道を挟んで少し下りたところではないかと考える。入って最初の火切地に高札場、領主の法令が書いてあるところがあり、一番奥に浅間神社がある。ただし、この図はまっすぐに描かれているが、少し曲がって、城下町はかぎ型、鍵手(身延には金手(かねて))という駅名が残る)、見通しが悪い造りになっているが、須走も少し傾向があると思う。真ん中は水路。のちに両側になるかもしれないが、きれいな水が流れていたと思う。

須走村の戸口

―表 C-②は須走村の家数。50～90 軒ほどの家があり、この並べ方を表 C-①検地帳から拾ってみた。須走の町が両側にあり、右下側から始まり、33 番の民部は現在の小野神主ご先祖で場所が分かる。民部草切は民部さんの従属的な身分であったかもしれない。次がその向かい側から下がってくる。縦の幅は右側、13～14 間位の幅で屋敷があった。左側 35～63 番までは 10～12 間位の幅で屋敷があったと想像ができる。道の真ん中に川があり、両側が町。横幅は私が考えるには 5 間、約 9 m 程度の幅だったのではないか。現在の道幅 7.5m、歩道の側溝まで図ると 75 cm で、5 間の幅が現在も続いていると思っている。5 間の幅の意味は「表 C-③御殿場の検地帳」を見ると御殿場の場合は東西の幅が 45 間。橋場から本町を見ていただくとそれぞれの幅が 20 間位だというのがお分かりいただけると思う。両側 20 間で残った 5 間、9m が広いのか狭いのかというと、かなり広い。東海道の幅は橋の幅の記録は残っているが、道の幅は分からない。例えば鈴鹿峠を越えて近江の国の関宿に街道が残っているが、小型車が 2 台すれ違える程度 3 間の幅しかない。東海道より広い幅だということ。5 間は古代の律令時代の官道。川口浅間神社の近くで官道が出てきたが、その官道の幅と同じ。須走は宝永の噴火で壊滅的な打撃を受けたが、元の幅で再建されたと思っている。だいたい 50～90 軒くらいの町で石高で 80～90 石。これがどのくらいの村か見る時に村高を見る。吉田 650 石、川口 350 石、須山 150 石位。これで見ると、須走の町は農業には向いていないことが分かる。標高が 800m の高い所。村山も 55 石なので、村山と須走は登山口の中でも富士山の道者を迎える観光業の度合いが高い。観光業をメインにした村。今で言う Go to の人に頼っている度合いがより強く作用している。いずれも畑だけ。川口だけは河口湖があり、その周辺を開発して江戸時代の中頃以降は唯一田んぼがある村。それ以外は畑だけ。一石は一人の人がお米を食べて年間暮らせる量。須走は人口 400 人前後なので、それ以外の人は運送業、富士山に関連する仕事がメインだったのではないか。

富士山宝永噴火と街並み

―須走は古文書が多く 1660、70 年から幕末まで残っている。上吉田も多くあったが、明治の大火で焼けた。須山は多く残っているが、虫干しを丁寧に行っていたようで糊がはがれて 1/3 程度しか判読できない。須走は、登山口の村で年貢の支払われ方に関係する有難い資料が残っている。宝永の噴火で J の資料で 5 間の幅があり、屋敷が現在とのつながりを見ていただきたい。宝永の噴火は大変な影響があり、須走は全村埋まる被害を受けたが、その時に国役金を一石につき 2 両のお金を全国にかけて復興資金 40～50 万両を集め、須走の村には 1 万両か 1 万 5 千両位を与えて残りは自分たちの懐に入れた。大変な熱を入れて復興に取り組んだ。なぜ復興に取り組んだか、一つは国境の村で籠坂を越えて人、荷物が通る、防衛の面でも重要な場所である。須走の借金帳簿を見ると、籠坂を越えて向こう側の方と交友関係があり、借金や色んな仕事の関係もある。そういう意味でも須走の町を一刻も早く復興して、富士山のこともあるが元の状態に戻そうという支配者の意欲が出てくると思う。

年貢 0 の村

―D-①②は須走の年貢資料である。例えば、4 番の小山源兵衛が出てくるとだいたい小田原藩の支配。それ以前は代官、幕領の支配だと分かる。37、38 番の間は年貢割付帳がない。1707 年宝永 4 年の噴火が 11 月末から 12 月にあったので、宝永 4 年はあるが翌年の割付帳は残っていない。地域の復興に当たった代官伊奈半左衛門でも宝永の噴火の翌翌年は年貢を取っている。それに対し 89 番、宝永 9 年からしばらく須走村の年貢はゼロになっている(表 D-②)。お上が村に年貢をゼロ

にしたことはほとんどない。須走で初めて見た。なぜかと言うと火事で焼けたから。火事で焼けると須走は年貢が払えない状態になる。逆に言えば、家屋敷があり、外から人を迎えて、輸送業で須走が成り立つという事が年貢割り付け帳から読み取れる。年貢の額は、75 番を見ると定免。定免制は一般的には一定の期間 3 年、5 年、7 年同じ税金を払う。ただし、定免制で 5~7 年やると、お上は次を少し上げてくる。須走の場合は定免制をやったが思わしくない、増額が難しい。幕末までの年貢割付帳では年貢は増えていない。米と書いてあるがこれは山手米(やまてまい)、山に入る税金。〇〇山に何ヶ村入るといふ時に村ごとに米で評価されるが、実際はお金で払っている。須走の税金の払い方は全て銭納、お金で払うというやり方。須走にとって建物が重要であった。

砂走り道

一須走の「須」は須山も同じだが、砂走りから来ているのではないかと思っている。図 E-①②は数少ない登山道の絵図になる。向かって右側、富士山中腹の六合、そのわきに「ハシリ」と書いてある。登りはジグザグに登り、下るときはハシリで下る。八合で甲州からの道と合流しているのが分かる。「ハシリ」はもう少し下に行くと、「スナフルイ」と書いてあるが、ここまででハシリ道が終わり、砂を払って草鞋を取り換える。草鞋を三重四重に履いて、その草鞋が擦り切れるくらいにハシリ道を下るのが須走の特色。左側の図は安永 6 年、江戸時代の中頃の図。これも直線でハシリ道が描かれている。登山道とハシリ道は別々である。真ん中に「ハシリコヤ」とあるが、ここもハシリ道の途中である。吉田の方にも「1 のハシリ」「2 のハシリ」というハシリ道がある。ただし、吉田はハシリ道 1980 年の庚申の御縁年の時に岩が転がってきて不幸なことがあったので、そこは通行止めになり、現在の下りの道が使われるようになっている。

須走の宿泊

一須走のどんどこで宿泊を行っていたのか。だれがどこに、何人くらい泊まったのかという資料はどの登山口も残っていない。須走の道の中頃に中宮がある。一合目が始まる前の所。図 E の左側の図では「オムロセンゲン」と書いてある関所のようなものが建っている。右側の図では「中宮役所」と書いてある。山役銭を徴収する場所。図 J-①②寛政 8 年の資料は、ここを通過する人たちが何人いて、須走のどこに泊まったのかというのを記録した唯一の資料。大申学、小申学さんか太夫と書いてあるのが御師や御師の一族。小松坊さんも御師だと思う。香積寺、永昌寺でも宿泊している。小野神主さんの所にも泊まっていたと思う。二つのお寺の右側の所は一般人の名前が書いてある、一般人の所にも泊っている。それぞれの登山口の所は御師さん、宿坊があつて、そこに優先的に泊まらせる。須山で言うと、道者が来ると太鼓を鳴らして御師が集まってきて、御師の持っている帳面を見て、どこから来たからどこの御師だとなる。吉田は、入り口に役所があり、どこから来て御師はどこか調べて、決まっていな人は担当の御師が交代で引き受ける。特に吉田や川口は御師の所に優先的に泊まらせた。須走の場合は、御師の所にもたくさん泊まっているが、それ以外の寺院や神社、一般の家に宿泊者を泊めるといふのが特色。村高の少なさと宝永の噴火をきっかけにして、より強く富士山の登山者を迎え入れる村として発展していったのではないか。本来なら道者は決まっているが、御師以外の人たちの宿泊を認めることで村全体を成り立たせる村であった。寛政 8 年の 6 月 3 日から月末にかけて 1999 人。この年は富士山に登る人が 2000 人位来ていた。残った 6 月末から 7 月の山仕舞いまでで、4000 人弱来ていたと推定できる。

2. 須走への旅

二川宿の人々の富士登山

—どんな人たちが須走に来ていたのか？旅行記、旅の記録をご覧いただきたい。資料 G-①東海道二川宿資料集。「申紀行草藁」。この人たちは須山から登っている。下段「下山、砂走りにて、…富士の麓馬返茶屋に日暮に着、…」須走到下山してきた人の記録であることが言える。

梅田村の人々の富士登山

—次に F の資料。現在の磐田市の方々の登山記録。梅田村を出発して、東海道大井川を渡り、油井(由比)に泊まり、藤路川(富士川)を渡る。富士道へ行き、富士山、地西坊(池西坊)に宿泊している。村山三坊の一つの地西坊。村山から登っていったことが分かる。「富士参詣して、下りてきたところ、29日172文須走江戸屋に泊まった」と書いてある。先ほどの B-②の須走の村の図を見ると、江戸屋さんは浅間神社の一番初めの所に位置している。そして竹之下、矢倉沢、これより石本(関本だと思ふ)へ行き、関本から石上寺(最乗寺さん)に寄って、江戸や鎌倉に行き、弁天様(江の島の弁天さん)に行つて帰つた。これも須走到下りてきたという事。

アーネスト・サトウの富士登山

—G の資料はアーネスト・サトウ氏、幕末のイギリスの外交官。日本語が堪能で坂本龍馬や西郷隆盛に会っている有名な外国人。外交官として明治になり日本に戻つてきた。旅行好き、山好きで、色々な所に登つた記録を残している。明治10年 G-②の資料。須山から登り、「七時半に頂上を出発し、吉田口と須走口の経路をたどつて下山を始め…そうした巡礼者たちの親玉は、偉い人で常に「先達」と呼ばれ、行く先々の宿代はただになる。」色々な宿泊の資料を見ると先達の分は引かれていて、一般の人たちだけの宿代になっていた。「しかし、富士の登山者には信者でも巡礼者でもない…私たちが利用した宿(米山新平)の…」とある。図 B に米山新平さんは見つからないが、図 B-②米山重平さんを指しているのではないかと思う。サトウは、これから5年後にまた須走口を下つている。この時、富士山の須走の側で湯気が出ているとある。富士山の須走口の頂上辺りに生卵2個置いたら15分後に1つが茹で卵になつたと書いてある。下山道はハシリの脇に登山道があると書いてある。図 B-②の左側、上から9軒の扇屋米山重平の所に宿泊した。サトウが追ひ出された米山穂積さんは右側の上から11軒目の甚太夫の所だと分かる。旅行記を見ることによって、須走の村の様子を知ることができる。

本居宣長の富士登山

—表 C-④本居宣長も富士山に22歳くらいの時に来ている。全集に載っている。伊勢国、松坂の国学者で、宣長の義理の兄、妹の旦那の三四右衛門が江戸に店を出しており、宝暦元年(寛永4年)に亡くなつている。後始末をしに江戸に行き、その帰りに富士山に登る。「7月12日夜ヲユメテ関本ヲ出ル、…駿州須走ニツク。神尾伝左衛門宅止、…」須走の神社に向かつて右側の一番須走口の近くに豊屋さんがあるが、あそこが神尾さんのお宅。ここに泊まつたという事が分かる。「餉クヒ休息シテ、…山半腹室宿ル、六合目室也、」先ほどの図 E にあつたハシリの合流する所あたりに泊まつた。「翌日は晴天、10時ころに山頂に行き、御鉢めぐりをする。…16時ころ須走到下つて神尾さんのお宅で休んだ。翌日は須走を出て十里木を通つて吉原にでて、東海道に合流して松坂に帰つた。」こういう記録が残っている。

有馬新七の富士登山

—資料 H、I の尊王攘夷の志士である有馬新七先生傳記及遺稿「富士山紀行」。1862年(文久2年)島津久光が派遣した者たちと斬りあいになり(寺田屋事件)亡くなる前、32歳のころに江戸から富士

山へ行っている。新七は、薩摩藩の薩摩藩校の教授もやっている文化人であると同時に、真影流の免許皆伝、腕の立つ人で尊王攘夷の志士であった。6月8日に矢倉沢往還を通り、関所で小田原藩からの役人が来て色々聞くので、群馬県の上野の浪人だと言って通った、と書いてある。「竹の下に至り…此坂を登りて左右に分るゝ道より右えは人馬不可通と制札有り」これは、先ほど話した通り、小田原藩が邪魔をして古沢を通らせないように御殿場を通れと言っている。新七はこれにめげずに古沢を通り、須走に入っている。香川県の武士とともに泊まっているが、「大西御師の内に止宿せむといひける故、高村好大夫所に止宿せり」先ほどの図B真ん中位の大申学の4軒下の高村織人(好大夫)に泊まったことが分かる。当時の須走のイメージを思い浮かべてほしい。「富士山に登るにあたり、精進潔斎をし、好大夫が御神酒を持ってきてくれた。翌日朝早く起きて、たき道という石碑がある所から入り禊をした。」お不動さんが滝の所にあつたのではないか。

3. 須走口登山道

一須走は下り道だとよく言うが、矢倉沢を通る桜山の住民をはじめ、関東の相模国(神奈川県)、金沢の野島に房総半島から渡ってくる渡しがある、房総、千葉の方から、相州の国の人たちがかなり来ていることが須走に関する資料から見えてくる。

- ① 須走の特色としては、吉田口と合流しているが、吉田口は馬返しから入ったすぐ鈴原の大日堂の所から1合目が始まるが、須走と村山の方は、龍ヶ馬場から御室浅間神社、富士山の中で用を足すときに烏枢沙摩明王(うすさまみょうおう)に浄化してもらうその神様の上から合目が始まっている。
- ② 下山道というが、富士山の火口に投げ入れた賽銭を拾うことができるのは大山の神社と須走だけである。火口に登った所に薬師がある、薬師に並んでいる石室11軒はみんな須走の方が権利を持っている。吉田は権利を持つことができない。大宮の剣ヶ峰の方には何軒があるが、十何軒の小屋はここだけ。富士山の風を防ぐにも小屋を壁にして歩くような絶好の位置、吉田からの道と須走からの道が合流して、この前を通る絶好の場所にある。

須走は独自性を持っているということを確認していただきたい。